

# 壁—S・カルマ氏 の犯罪

映画文学人生論

原作：安部公房 (1951) 「月曜書房」

参考：『砂の女』1962)

監督：勅使河原宏 (1964)

出演：仁木順平 岡田英次  
砂の女 岸田今日子  
村の老人 三井弘次

脚本：安部公房

撮影：瀬川浩

音楽：武満徹

ぼくは自分の名前がどうしても想出せない  
でいるのでした

安部公房『壁—S・カルマ氏の犯罪』は非現実の世界を描いた小説である。現実の世界を模写したリアリズムの文学ではない。

主人公のぼくは、ある朝、目を覚まして、何かしら変だと思う。歯をみがき、顔を洗っても、ますます変だ。

そのうち、ペンを握ったまま、サインができずに困っていることに気づいた。自分の名前がどうしても想出せないのだ。名刺入れを取り出してみたら、名刺は一枚も入っていない。身分証明書も手紙も上着の裏の縫取にも名前が消えている。

会社に出勤して、受付の名札を見た。三段目の左から二枚目が「S・カルマ」となっていた。それは、「ぼくの名前のようにありませんでしたが、やはりぼくの名前らしくもありました」と主人公は読者にうったえる。

二階の三号室のドアが開いていて、ぼくのデスクが見えるが、驚いたことに、ぼくの椅子にはもうちゃんと別のぼくが坐っていた。

現実にはあり得ないような話でも、文学の世界では似たような話がある。ゴーゴリの『鼻』では八等官コワリョーフは朝早く、自分の鼻が消滅している事に気が付いたし、カフカの『変身』では布地の販売員グレゴール・ザムザがある朝、目覚めると巨大な毒虫になっていた。



# 壁-S・カルマ氏 の犯罪

映画文学人生論

この種の小説はどのような読み方をすればよいのだろうか。言葉の意味を考えながら、話の筋を追うというまともな読み方をすると、頭がおかしくなってしまう。シュールリアリズムの詩のようなもので、真面目に考えたりせず、眉に唾をつけて読み流すだけでよいのかもしれない。

安部公房原作の映画は、勅使河原宏監督の映画『砂の女』を観たことがある。

男が新種のハンミョウ（道おしえ）を採集するために、砂丘の村に行くと、ある民家に滞在するように村人からすすめられた。女が一人で暮らすその家は穴の底にある。地上へは縄梯子で出られるが、その縄梯子は夜中に取り除けられてしまった。脱出は不可能。七年後、男は妻の申立てにより失踪者として、死亡の認定がなされた。

これも非現実の世界の話ではあるが、現実の世界でも働き盛りの夫が蒸発して、失踪者になる例はいくらでもある。現実と非現実との境はほとんどないという奇妙なリアリティを感じる。

それに比べると、『壁—S・カルマ氏の犯罪』のほうがさらに荒唐無稽な非現実の世界のような気がする。夢かうつつかといえ、夢の世界の話だ。夢では私は自分の名前を忘れてるし、もう一人の私がわけのわからない行動をする。

見渡すかぎりの曠野です。

その中でぼくは静かに果てしなく成長してゆく壁なのです。